# パウル・ベッカーの客観主義的な音楽美学

小島広之

20 世紀前半のドイツ語圏を代表する音楽批評家、パウル・ベッカーPaul Bekker（1882-1937）は、今日では音楽社会学の開拓者として知られているが、第一次世界大戦後には様式論的観点から「新音楽」と称される客観主義的な理想的音楽像の構想に力を注いだ。

第一次世界大戦後には、革新的であり、かつ様々な社会的階層の人々によって普遍的に受容されうる音楽が求められていた。ベッカーが新音楽を客観主義的な音楽として構想した理由とは、この二つの、ともすれば相反する要求を満すためであった。本稿の目的は、ベッカーが目指した客観主義とはどのようなものであったのか、とりわけ客観主義的な音楽の創作と聴取とはどのようなものであると考えられていたのかを明らかにすることである。

はじめに、ベッカーが、新音楽の客観主義性を基礎付けるために、新音楽固有の生成論と音響論を立論したことを明らかにする（第 1 節）。続いて、ある種の作曲家不在の音楽である新音楽の作曲をベッカーがどのように正当化したのかを明らかにする（第 2 節）。ベッカーは、作曲家による着想と身体的作曲に注目することで、作曲家不在の客観主義的作曲を正当化した。最後に、ベッカーが構想した客観主義的音楽固有の聴取態度の実態を明らかにする（第 3 節）。ベッカーは、新音楽の聴取は、その客観主義性ゆえに、音楽に関する専門知識がなくともあたかも自己を理解するように実行されうると考えた。